すべての高齢者の暮らしに安全な日常を提供してください
ー長岡京市の配食サービス改定の疑問

「4月から配食サービス、高くなったわ～」という声が聞こえてきます。
事業者によって異なるのですが、毎日利用されている方だと月に3000円以上負担増になった方もいらっしゃいます。そのため利用を控えたり、利用そのものを中止する方もいると配食事業者からお聞きしました。安否確認が目的の事業ですから利用を控えたり、利用中止が増えていけばその事業の目的は達成されません。
なぜこんなに負担が増えたのでしょう？それは長岡京市の配食事業への費用負担が減ったからです。
これまでの一律補助から一定数以上の利用は定額の補助にするなど業者への支援額が減ったことに起因しています。
きょうと福祉倶楽部が長岡京市に情報公開請求でその議論の経過を取り寄せました。流行りの「のり弁」(黒く塗りつぶされて隠された情報)もある公開文書でした。
その中でも事業者さんやケアマネジャーさんから利用の抑制など好ましくない「効果」を懸念する声が確認できました。
なのに、長岡京市は「制度の持続可能性」というキーワードを用いて負担増を行うことを正当化して開始したのです。
持続可能性という言葉はさまざまな福祉の切り捨ての口実に使われるマジックワードです。
例えば介護保険サービスは 2000 年の開始からどんどんとサービスが利用しづらい制度の改定が行われています。
給付を制限する理由はいつも制度の持続可能性という言葉が用いられています。
でも利用者が利用できない、利用を制限されてニーズを満たせない制度が介護保障という国の責任を果たしたことになりますか？
だからお家で暮らしたくとも暮らせない高齢者が増え、家族が介護に縛られて生活が破綻するという悲劇も後をたたないわけです。
配食サービスも同じ。
ニーズはあるのにニーズを満たさない制度にしてしまったらその制度は死んでしまいます。
見守りがあれば事故を未然に防ぐ確率は間違いなく減らせるのに使えない日が増える、使えない費用になってしまえば制度は絵に描いた餅になります。
憲法が保障する「健康で文化的な最低限度の生活」は貧富の差なく、等しく守る責任が自治体にはあるのです。
　使えない階層が間違いなく出てしまうこの制度の改定は間違いです。
それで削減された年間費用はわずか 200 万円程度ということだそうですが、
削る場所が違いませんか？

本の紹介

権利としての
介護保障をめざして
ー介護保険20年の問題点とこれから

黒岡 有子【著】
価格 1,980 円（本体,800 円）
学習の友社（2022/06 発売）

筆者の黒岡さんは石川県内で働くケアマネージャーさんです。
黒岡さんは介護保険制度の施行時から介護保険の現場で高齢者に向き合ってきました。そしてその中でどんどん利用者の実態をみない制度改悪に私たち同様に直面し、心を痛めてきた現場の仲間です。
この本では介護保険が始まって 20 年間、どのような改悪が行われたのが時系列を追って整理しています。また、その改悪でいかに現場と利用者が振り回されてきたのかも具体的に示しています。次々と繰り広げられる改悪は現場にいる私たちはもちろん、利用者も覚えきれないほど押し寄せてきています。そのながれを余すこと無く記録したこの本は冷静にこの国が目指す介護の姿を告発する良書だと思います。
権利としての介護保障を実現するためには国が目指すものを知り、私たちが求める介護の姿を対置しなければなりません。その課題を考える事もできる内容です。現場にいる介護現場の仲間たち、利用者双方に手に取って頂きたい。